

倫理，政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和5年度（第3回）共通テストの「倫理，政治・経済」の問題は，大問7問で構成され，「倫理」分野から4問，「政治・経済」分野から3問が出題された。設問は，「倫理」分野から16問，「政治・経済」分野から16問であり，設問は全て単独科目からの引用で，配点は50点ずつであった。

ここでは，本年度の問題に対して，「倫理」と「政治・経済」それぞれの科目の問題作成方針に基づいたものになっているかどうかについて評価を実施した。

なお，評価に当たっては，14ページに記載の8つの観点により，総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

第1問 「正義」について（源流思想）

高校生の会話という場面から，「正義」の考え方に関連して，先哲の原典を読み取ることが重視した学習過程から広い視野での考察や議論の必要を伝えている。標準的な難易度の大問といえる。

問1 イスラーム，ヒンドゥー教，仏教，ユダヤ教の基本的な考え方について問われている。

各宗教の教義や宗教的義務に関する知識を求めており，普段から各宗教の原典などから理解を深めていれば，十戒についての正確な判別はできたはずである。

問2 宗教や思想家に基づいた生き方が問われた。パリサイ派やアリストテレス，ジャイナ教，老子についての基礎的な理解で解答できる。

問3 先哲の文章から読み取れる内容と知識を組み合わせで解答する設問で，荀子の性悪説の正しい理解が求められる標準的な問題であった。

問4 原典の一部を比較し，内容の読み取りに加えてストア派の自然法思想へのつながりに関する知識が問われた設問。思想史については，用語よりも内容や意味を問うような工夫も考えられる。

第2問 「問い」について（日本思想）

生徒と先生が交わした会話や，生徒がまとめたレポート，日記，資料を通じて，「問い」をテーマに考えを深めさせる大問である。教科書での取り扱いが少ない思想家や用語に関するやや難しい知識問題が含まれていたものの，出題範囲は古代から近現代までバランスがよく，全体的には標準的な難易度の大問である。

問1 平安時代の日本の仏教者についての理解を問う，標準的な難易度の設問である。

問2 日本の神々についての理解を問う知識問題であるが，「天つ神」や「祀る神」，「祀られる神」については詳しく記述されていない教科書もあり，やや難しい設問である。

問3 伊藤仁斎の説いた「仁」の思想にあてはまるものを，身近な人間関係に即した説明から選ぶ設問であり，既得の知識と資料読解を組み合わせた良問である。

問4 aは日記の内容を，bは資料の内容をそれぞれ読み取る設問である。三木清は教科書で扱いが少ないが，資料の読み取り自体は平易である。授業で学習した先哲の考え方を手掛かりとして，資料を考察させるなどの工夫があってもよかった。

第3問 自由とは何か（西洋近現代思想）

高校生が「自由」をテーマにしたプレゼンテーションと振り返りを行うという場面設定の中で、西洋近現代思想について問うている。プレゼンテーションの準備段階では自由と制約、規範、自己決定との関係について先哲の思想を手掛かりに探究し、プレゼンテーション後のディスカッションと振り返りによって自由と迷い・弱さとの関係にまで議論を深めている。

問1 ベンサム、ロック、トマス・アクィナスの思想に関する基本的知識が問われている。ただし、グロティウスについて理解が浅いと誤答しやすく、やや難易度が高い。

問2 カントに関する基本的知識があれば、読書ノートの空欄を埋められる問題であった。

問3 資料の読み取りによって解答できる。ドイツ観念論や哲学者シェリングについての知識が問われず、また②と④の前半部分がまったく同じで、資料よりそれらは誤答と分かるため、平易な読解問題となっている。資料はよく精選されており、その活用方法に工夫がほしい。

問4 第3問全体の趣旨を問う設問となっている。プレゼンテーションの前後の議論を踏まえた自由の理解の深まりを押さえる必要があり、自由と制約の関係のみならず、自由と迷いや弱さの関係まで考察させている。標準的な難易度でありながら深い学力が問われる良問である。

第4問 運の違いが生む格差を社会が埋め合わせをするべきか（青年期・現代の諸課題）

「運の違いが生む格差を社会が埋め合わせをするべきか」という現代の倫理的諸課題について、会話や資料を基に知識や読解力を問う大問である。

問1 青年期についての心理学者の用語に関する難易度の高い設問である。「心理的離乳」の用語は判別できるが、教科書に記載の少ない先哲と比較する場合は、より明確な手掛かりが必要である。

問2 アマーティア・センの思想とモノカルチャー経済に関するやや難易度の高い設問である。

問3 ロールズの思想の理解と資料の読解の二つが必要な設問である。ロールズの思想については基礎的な内容であるため容易に選択肢を2択に絞ることができ、標準的な難易度である。

問4 会話文に高校生の考察を当てはめる標準的な難易度の設問である。会話の内容ではメッセージ性がある。思考力・判断力・表現力等を問う「倫理」の試験には必要な設問である。

第5問 経済分野の学習の振り返り

「経済分野の学習の振り返り」をテーマにした経済分野の問題であり、場面設定としては、二人の生徒が一緒に「政治・経済」の授業を振り返りながら、学習したことをノートに整理したというものである。出題については、経済に関する考え方や用語の理解等を、様々な資料を読み取らせながら問う形式の設問が多く、全体としての難易度は標準である。

問1 都市の過密化と地方の過疎化についての基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問2 日本の地方財政についての基本的な知識・理解を問う、標準的な設問である。

問3 日本の地方公共団体、NPO（非営利組織）、中小企業、それぞれの特徴に関する知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問4 環境問題に対する国や地域の取組みについて、リサイクル率に関する資料を読み取る力を問う、標準的な設問である。

問5 金融政策について、基本的な知識・理解を基に日本国債の保有者の構成比と保有高に関する資料を読み取る力を問う、標準的な設問である。

問6 民間最終消費支出や民間企業設備投資に関する基本的な知識・理解を踏まえて、メモを読み取る力を問う、やや難易度の高い設問である。

第6問 国内外の政治や法制度

「国内外の政治や法制度」をテーマにした政治分野の問題であり、場面設定としては、生徒たちが、大学のオープンキャンパスに参加し、法学部の模擬授業を受けることにしたというものである。出題については、模擬授業のテーマから知識・理解を問う設問を中心に出题されているが、最高裁判所の判例などの資料を読み取らせる設問や時事的な要素を含む設問もあり、全体としての難易度は標準である。

問1 パレスチナ問題についての知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問2 戦争の違法化や集団安全保障など、国際平和についての基本的な知識・理解を問う、やや平易な設問である。

問3 日本の安全保障についての知識・理解を問う、標準的な設問である。

問4 日本の立法と行政の責任関係についての知識・理解を基に思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問で、標準的な難易度の良問である。

問5 少年法に関する時事的な要素を含む知識・理解を問う、標準的な設問である。

問6 表現の自由についての最高裁判所の判例を読み取る力を問う、やや平易な設問である。

第7問 SDGs（持続可能な開発目標）の意義と課題

「SDGsの意義と課題」をテーマにした政治分野と経済分野の融合問題であり、現代社会の諸課題について幅広く取り上げられている。探究する学習における主体的・対話的で深い学びを実現する学習手順に沿って各設問が設定されており、昨年度に引き続き高等学校の授業改善を前提とするメッセージ性のある問題である。出題については、読み取らせる文章や資料は多いが、全体としての難易度は標準である。

問1 環境と開発に関する国際的な会議の変遷についての知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問2 京都議定書とパリ協定についての知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問3 国際機関の仕組みについての知識・理解を問う、やや難易度の高い設問である。

問4 発展途上国の対外債務の問題に関する複数の資料を読み取る力を問う、やや平易な設問である。

以上の内容から、問題の難易度は適正で、学習指導要領の定める範囲で出題されており、出題内容に大きな偏りはなかったと考える。

3 分量・程度

全体の設問数は、大問数7、総設問数32で、昨年度の共通テストの本試験の設問数と同じ適切な設問数であった。試験全体の分量や文字数についても、「倫理」と「政治・経済」それぞれの問題作成方針を考慮すると適切なものであったと考える。

「倫理」の問題においては、単なる知識だけではなく受験者の知識を前提とした思考力・判断力・表現力等を図ろうとする問題作成者の意図が読み取れる。基礎的知識を問う設問に関しては、正誤問題や組合せを入れることで受験者の確かな知識をはかることができたと思う。大問ごとに「正義」、「自由」、「運と努力」など現代の若者が考察していくべき倫理的諸課題をテーマとして取り扱っている。

「政治・経済」の問題の難易度については、標準的な難易度の設問が多く、適正である。概念や知識を活用して解く設問や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もあり、良問もみられる。その一方で、昨年度に比べ、端的に知識・理解を問う設問が増え、全体的に問題文の分量も減少した印象があり、解答にかかる時間には余裕があったのではないかと推測される。

4 表 現・形 式

各設問の文章表現・用語については、受験者にとって適切であった。

「倫理」の問題においては、各設問の文章表現・用語について特段の問題はなかった。写真や絵画資料は使われていなかったが、図表の扱いは適切であった。会話文や資料を活用した設問などが多く、探究学習の過程が重視された場面設定であり、設問形式であったといえる。資料の活用には課題もあったが、全体を通して、「倫理」の学びの応用可能性が示されていた。

「政治・経済」の問題においては、場面設定が、第7問は生徒が主体となって活動したものになっていたが、他の二つの大問は、授業で学習したことを整理したノート、大学のオープンキャンパスの案内から、それぞれ設問につなげる形式であり、現代社会の諸課題について主体的に考察させ、公正な判断力を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てるという「政治・経済」の科目の目標と照らしてやや不十分な点がみられる。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テストの3回目となった本年度の本試験の問題は、全体として、授業において生徒が主体的・協働的に学習する場面や、諸課題を発見し、解決方法を構想する場面、そして、資料を基にして考察する場面が設定されており、高等学校等における授業が知識の一方向的な伝達だけに留まらないよう、改善を促すメッセージとして受け止められた。また、複数の資料を読み取り、現代社会の諸課題を多面的・多角的に考察させる、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もみられた。

今後も現状の問題作成方針に沿った良問の作成を期待したい。